

聖ルカ福音書第2章1節～20節
於：聖パウロ教会 司祭 山口千寿

皆さん、クリスマスおめでとうございます。

毎年、ご降誕日の礼拝では、日曜学校のページェントが演じられますが、それを見ることが、ご降誕日を祝う一つの楽しみとなっています。日曜学校の生徒たちとスタッフの皆さんが登場人物になりきって、或いはチョッと緊張気味に、そして恥ずかし気に、主イエスさまのご降誕の場面を再現して、神さまの救いのみ業を思い起こし、感謝を捧げます。

このページェントが、天使ガブリエルがマリアのもとを訪ね、主イエスさまの誕生を告げるところから始まったように、神さまの救いのみ業は、そのすべてがマリアに対する衝撃的なお告げとそれを自分の身に引き受けたマリアの応答から始まりました。

天使のお告げはマリアの理解を超えたものでした。不可解な言葉であっただけではありません。許嫁の夫ヨセフにとってはマリアに対する信頼を失わせるような出来事でしたから、密かに離縁を考えざるを得ませんでした。ヨセフだけではありません。マリアの周りにいた人たちは、誰もがマリアに疑惑の目を向けたに違いありません。孤立へと追いやられるところでした。そんなマリアを救ったのは、親類のエリサベトも老齢にも関わらず、また不妊の女と烙印を押されていたにも関わらず、身ごもっているという天使の知らせでした。

この後、マリアはエリサベトを訪ね、3ヶ月の間、彼女の家滞在することになります。そこで、お互いの身に起きたことを分かち合い、それが神さまによる出来事であることを確認し合うことができたのです。2人の交わりだけが、マリアの神さまへの応答を支え、励まし、「いと高き方の子」の母となる覚悟を固め、受け入れる道を開いたのです。自分を肯定し、深め、強めてくれる交わりのないところでは、誰も生きていく希望を見いだすことできません。

マリアは、「わたしは主のはしためです」と言って天使のお告げを受け入れました。「しもべ」という言葉の女性形が「はしため」です。「しもべ」は、「奴隷」を意味している言葉です。マリアは女性ですから、「女奴隷」ということになります。マリアは、「わたしは主の女奴隷です」、つまり、自分のことを決定する権限は、自分にあるのではなくて、主が持っておられますと言って、主の言葉に従う決断をしました。

「はしため」の原語を辞書で引くと、「女奴隷」とあって、神さまに対して人が自分を卑下しているときに使う言い方で、東洋的な表現であると書かれています。マリアは、へりくだった態度で、神さまの前にひれ伏したのです。自分は神さまの偉大なご計画に用いられるには、相応しいものでないことは初めから分かっているけれども、神さまのお言葉に、ただただ従う以外には他には道はないことを悟って、自分を神さまの前に投げ出したのでした。

マリアは、ガリラヤのナザレというわびしい村の田舎娘でした。当時のナザレは、ルカ福音書では「町」と書かれていますが、小さな村と言った方が適当のようです。村の人々は、ナザレでは手に入らない品物を買うために、6キロも離れたセフォリスという町まで出かけなければなりませんでした。ナザレは、そんな小さな村です。旧約聖書にも登場しません。

ガリラヤ地方というのは、イスラエルの北の国境に近い地域で、ガリラヤという名前自体、一説には、「周辺の地」を意味すると言われていています。「異邦人のガリラヤ」（イザヤ書8：23）と呼ばれましたから、ユダヤ人以外の人々も多く住んでいたのでしょう。中央のエルサレムに在住し、宗教的・民族的純粋さを保つことを大事にした指導的立場にある人々から見れば、ガリラヤは「暗黒の地」ということになります。「ナザレから何か良いものが出るだろうか」と言って笑ったのは、フィリポからイエスさまを紹介されたナタナエルでした（ヨハネ1：46）。

ですから、ナザレという村は、イスラエルの周辺地域の名もない小さな村で、その取るに足りない「はしため」が、マリアであったのです。

日本語の「はしため」という言葉は、辞書には、「召使いの女」「女中」とあります。漢字で書くと、「端」と「女」で「はしため」です。「端」というのは、「まともにそろった状態でないこと」、「はんぱ」、「ちょうど切りの良い数に余った分」、「取るに足りないもの」などと説明されています。「端」というのは、何時でも切り捨てられてしまうものです。「端金（はしたがね）」という表現がありますが、端金というのは、そんな金額ではまともには取り合ってもらえない、相手にされない、役に立たない僅かのお金のことです。

「はしため」という言い方が、へりくだったものの言い方であるとしても、それだけではなくて、マリアという女性が、どのような立場にあった人かを、よく言い表しているように思います。

さて、この言葉から連想して、『ぼくの神さま』という、昔、観た映画を思い出しました。原題は、“Edges of the Lord”、「主の切れ端」とつけられています。

この映画の中で、ある村の教会の神父が、ミサの準備のため、聖餐に用いるホスト（ウェファース）を円く型抜きをしている場面があります。型を抜いた後の切れ端を、一人の少年におやつ代わりに与えようとしています。この少年は、ポーランドに住むユダヤ人の一人息子で、ナチの迫害から生き延びるために、両親から離れ村人のもとに預けられていたのです。父親からカトリックのお祈りを教えられ、カトリックを装って追及を逃れようとしていました。

切れ端を与えられて戸惑っている少年に、神父は「心配するな、これは聖別していない。切れ端は祝福されないのだ」と言います。少年は「僕らは切れ端」と尋ねます。神父は「人間はみな切れ端さ。だが祝福されている。」と信仰の言葉を語ります。でも少年は、歴史の現実の中で迫害され、ユダヤ人であることを隠して生活することを余儀なくされている自分自身のことや、強制収容所

に運ばれて行く同胞のユダヤ人を思い、「祝福されていない人もいるよ」と反論し、2人の会話は続きます。

この映画は、登場する子どもたちの初聖体、初めて聖体拝領をする場面で終わります。他の子どもたちには円いホストが授けられますが、このユダヤ人の少年に授けられたのは、円いホストではなく、聖別された切れ端でした。聖餐をいただくことは、最大の祝福です。聖別された切れ端は、当時、人種差別を受け、切れ端とされていたユダヤ人たちや、大人の犠牲となった多くの子どもたちを象徴しています。切れ端も祝福の中にあることを表しているのです。映画のプログラムの解説には、原題のタイトルを、「主の栄光の及ぶ世界の縁」と言う意味だとありました。

神さまの真実（まこと）は、自分の人生を切れっ端のようだと思い、悩み苦しむ人を、祝福の中へと呼び出します。

詩編146編はこのように歌います。

「とこしえにまことを守られる主は
虐げられている人のために裁きをし
飢えている人にパンをお与えになる。

主は捕らわれ人を解き放ち

主は見えない人の目を開き

主はうずくまっている人を起こされる。」

この詩編で歌われている神さまの真実（まこと）を実現するために、主イエスさまは人となって、お生まれになったのです。その誕生は、富や権力や高い身分の中で、起こったものではありません。歴史の表舞台とは何ら無縁の場所で、貧しく名もない「はしため」の子として、人となられたのです。

人間の弱さ、無力さをご自身のからだで知り、切れ端のような人々に、ご自身のからだを裂き与えて祝福に与らしめるためでした。そのようにして、神さまの真実（まこと）を貫き通されたのです。

主のご降誕を、喜び祝い、感謝の内に、この聖餐を捧げて参りましょう。